CBRC Newsletter 24
SUMMER 2008
http://www.cbrc.jp/

５年一昔

後藤　修

(Osamu Gotoh)

招聘研究員
京都大学 大学院情報学研究科 教授
日本バイオインフォマティクス学会 会長

エッセー ● 1
トピックス(生命情報科学技術者養成コース) ● 2
研究紹介(ホートン) ● 3
お知らせ・成果紹介・研究員紹介 ● 4

俗に１０年一昔といいますが、時代の変化が著しい今日ではその半分の５年くらいが一昔かも知れません。くしくもCBRCから本拠地を京都に移して早５年が過ぎてしまいました。東京に比べて時の流れがゆっくり感じられる京都の方がのんびり系の自分には合っているだろうと予想していたのですが、幸いおおむねその予想はあたっていたようです。しかし、CBRC創設期のあわただしくも活気に満ちた頃が懐かしく思い出されることもしばしばです。特に、様々なバックグラウンドをもつ若い人々（自分自身ははずれ値でしたが）が仕切りのない一部屋で過ごした一時期など、生命誕生前のコアセルベート状態を連想させます。あの時代を皆と共有できたことが自分にとっての大きな財産だと思っています。

さて、今ではCBRCに片足首くらいしか浸かっていないほぼ足湯状態の者にとって現在のCBRCがどう映るか、がこの原稿の依頼を受けた大きな理由ではないかと推測されます。言うまでもなく、CBRCはバイオインフォマティクスの分野において着実な成果を挙げている質量ともに日本最大の研究者集団です。アカデミックスと産業界との結びつきも絶妙のバランスを保っているように見受けられます。ただ、国内の他の関連研究機関に比べ、主要なデータベースを抱えていないことが一般からの可視性を低くしているようにも見えます。その分、世界をリードするようなキラーアプリケーションを開発して欲しいな、というのは少し欲張りでしょうか。流れの移り変わりの激しい最先端の分野で活躍することも大事ですが、２未来、４未来（１０年、２０年）後の人々にも、「あの仕事はCBRCで行われたのだ」と認識してもらえるような息の長い研究も続けて欲しいと願っています。

当時はまだ学生気分を漂わせていた開設当時のメンバーも、今では最も脂ののった年代にさしかかっています。油断をすると忍び込みかねない「中年の危機」を寄せ付けずにさらなる加速を遂げられることを期待しています。一方、廊下でお会いしても誰だか分からないという若い人もずいぶんと増えてきました。あの見知らぬおじさん誰とうさんくさい目で見られないようCBRCにおける存在感をもう少し上げられたらいいと思っています。最後に、まだ日本バイオインフォマティクス学会に入会されていない方は、是非ご入会のほどをお願い致します。